

海外だより

## イチパーの組織と活動について

九州保健福祉大学 波多野 義 郎

### 1. イチパーとは

イチパーとは国際保健体育レクリエーション・スポーツ・ダンス協議会 (International Council for Health, Physical Education, Recreation, Sport and Dance, ICHPER・SD) の頭文字をそのまま読む、団体の名称である。この団体は保健体育、レクリエーションを始め人間の身体文化に関する全ての分野を対象にした学問・教育・福祉に関する研究・実践を目的とする、この分野に関わる世界最大の専門家集団 (協議会、学会としての機能も持つ) で、145カ国が加盟している。1958年に設立されて以来、隔年に世界規模の学会大会を開催して研究・交流を進めている。日本では1993年横浜において第34年次大会 (第〇回とは言わずに、設立以来〇年目と言う数え方を採用している) を開催した。アジア・北米・ヨーロッパなど7つの地域 (region) があり、各地域で隔年に地域学会大会が開催されている。この団体についての詳細情報は以下のホームページを参照されたい。

[www.ichpersd.org](http://www.ichpersd.org)

イチパーの対象領域の中心概念は HPER (保健体育レクリエーション) であるが、それは設立時の母体に当たる AAHPER (American Alliance for Health, Physical Education and Recreation, 全米保健体育レクリエーション協議会) の名称に由来する。AAHPER は後にダンスを含めて AAHPERD へと名称変更を進め、同様にしてイチパーは1993年の世界大会時にダンスとスポーツを加えて ICHPER・SD へと名称変更をしている。対象領域が HPERSD, 即ち保健体育レクリエーション, スポーツ, ダンスにまで拡大された訳である。本稿では、時代の流れによる対象概念の変化を意識しない訳ではないが、団体名称をいちいち変えずに、イチパーと言う名称で通す立場を貫いている。

イチパーの組織と機能に関する情報の概略を別掲1に示す。イチパーは特別のスポンサーを持たず、加盟団体からの会費納入によって運営されているため、財務状況は決して楽ではない。そのため世界学会大会開催時に出席者の全てが個人会費を納入する仕組みによって、赤字を避けようとしている。事務局は米国メリー

ランド州レストン市にある AAHPERD ビルの一室を借用しているが、設立当時に「特別格安」だった室料の特典はとうになくなっていく。

一方、HPER に関する世界規模の推進運動のための国際協力を推進する上で、団体会員の一翼を担っている AAHPERD 所属の専門家たちの協力が得られることは、大きな力になっている。これにより、機関紙発行、常置委員会による会務推進、専門分科会の活動等がそれなりに円滑に進捗していると言える。

イチパー・アジア地域学会大会は1994年にマレーシア国クアラルンプールにおいて第1回大会が開催されて以来、隔年開催を目途にしつつ過去に4回の大会を開催してきた (別掲2)。本年12月には第5回イチパー・アジア地域学会大会 (The Fifth ICHPER・SD Asia Congress) を日本で開催する運びとなり、日本体育学会、全国大学体育連合、日本生涯スポーツ学会、日本体育測定評価学会の国内4共催団体の代表者によって組織委員会が結成され、準備に当たっている。またその会場ならびに会期として、2004年12月3-6日、構成団体の一つである日本生涯スポーツ学会事務局が置かれている鹿屋体育大学を会場として実施することが決定している。実質上の大会準備・運営については、日本生涯スポーツ学会事務局ならびに鹿屋体育大学が主体的に担い、具体化作業を進めている。この大会についての詳細は以下のホームページを、また事務局との対応についてはもう一つのホームページを、それぞれ参照されたい。

<http://lifelong.nifs-k.ac.jp/ichpac2004/>

[Ichipac2004@nifs-k.ac.jp](mailto:Ichipac2004@nifs-k.ac.jp)

### 2. 近年の動向

イチパーの近年における主な役員名、世界学会大会、アジア地域学会大会の開催状況等を別掲2に示す。このところ会長が米国関係者に偏っている向きが気になる人がいるかもしれないが、それは既に紹介したように、会務運営が AAHPERD 関係者のバックアップによって成り立っている面と無関係ではない。

アジア地域の中では、韓国、台湾、マレーシア、日

本、フィリピン、タイ等が協力して、活動が進められてきたが、それ以外の国（例えば中国やインド、インドネシアなど）、から積極的な参加をどうやって引き出すのかもこれからの課題である。

各国からの加盟団体は、日本のような民間の任意団体の場合もあるが、発展途上国などでは政府内の体育・スポーツ担当行政庁がそのまま加盟している例もある。先進国では民間団体であるために世界学会大会を誘致するだけの資金に乏しい傾向があり、反対に途上国では、政府が資金源になり得るにも拘らず、政府そのものが日本等からの援助金に頼っている傾向があり、開催地を決めるのに苦勞しているのが実情である。実際問題としてここ数年間は世界学会大会が3年間隔に延びており、アジア地域学会大会の開催年も規則性に多少の乱れがある。また同様に加盟年会費を納入しない、一種の幽霊加盟国も多く、本部の資金運営状況は苦勞の連続である。

それにしてもイチパーの組織において歴代の会長や各学会大会の組織委員会会長たちのリーダーシップが、数々の難局をかいくぐってこの組織を活性化してきた。それはそれで素晴らしいことではあるが、財政面、大会開催地引き受け問題、国際間協力の困難性などの課題解決が望まれている。

一方、イチパーは、国連のユネスコ組織に言う NGO（非政府＝民間団体）の立場から、世界各国における体育・スポーツ教師の地位向上を図ることを、その大きな目標の一つとして掲げている。中でも発展途上国の教

師やその職業上の立場を守ることを主眼とするとしている。このような観点から、イチパーは1978年にユネスコに働きかけて、「体育・スポーツの国際憲章（International Charter of Physical Education and Sport）」を制定するのに協力した。ユネスコでは引き続き体育・スポーツ担当行政官国際会議（MINEPS I, 1976；MINEPS II, 1988, モスクワ；MINEPS III, 1999, ウルグアイ国プンタデルエステ）を開催して、この分野における国際協力を継続している。MINEPS の下部組織としての CIGEPS（Intergovernmental Committee on Physical Education and Sport, 体育・スポーツに関する政府間協力委員会）には、イチパーや WHO, IOC を含めて体育・スポーツ関係の国際団体が加盟して、協力関係を保っている。

MINEPS 及び CIGEPS における協力関係の中で、イチパーとユネスコとの間に協約が結ばれ、以下の3領域についてイチパーからの提案内容がユネスコ本部に受理された（2001.4.30）。イチパーとしてこのような文書を作成するについては、各国の加盟団体内における専門家集団に諮問して、内容を充実させるように努めた。

- (1) 学童のための体育・スポーツの規準
- (2) 体育の専門指導者養成に関する国際基準（別掲3）
- (3) 学校体育に関する国際的展望

同様に、イチパーは IOC 及び WHO と良好な信頼関係を保持している。



第4回イチパー・アジア地域学会大会における役員たち  
（左から3人目デブリース副会長，右から2人目ヤング会長）



アジア地域学会総会を総括するデブリース副会長

別掲1

## ICHPER・SDの機能と組織

### 1. 目的と使命

- 1) 基本的には当該領域（HPERSD）における教師（指導者）の国際団体である。従って世界各国間における情報交換・研究活動・普及推進活動を活性化しようとする。
- 2) 特に発展途上国における保健・体育・レクリエーション等の発達と、更に世界的視野の中でこの専門領域の職業上の地位が向上するために努力しようとするものである。

### 2. 会員資格

- 1) 団体会員：各国内の該当領域専門家集団で、団体として加盟する。団体構成会員数によって年会費が200, 500, 2500米ドルの3種類になる。役員はここに言う構成団体から選出される。
- 2) 個人会員：当該領域に従事する専門家で、個人として所定の年会費を納入する。  
学会大会に参加する者は必ず個人会員として年会費を納入するものとする。（所属国の経済発展状況により、年会費は40, 30, 20米ドルの3種類になる。日本は40米ドルである。）
- 3) 終身会員：1500米ドル
- 4) 機関会員：大学等の専門機関が登録するが、各種学会大会・研究会を主催する権利が与えられる。（100米ドル）
- 5) その他：国際団体（200米ドル）、後援団体（2500米ドル）、協賛団体（5000米ドル）

### 3. 役員（任期は4年）・組織

- 1) 理事会：組織の最高議決機関で、各国から1名の理事（1国から複数の会員団体がある時には団体同士で1名を選出）を選出して構成する。
- 2) 各地域組織：アジア・アフリカ・欧州等7地域があり、それぞれ地域担当副会長（公選）・事務局長（副会長指名）を置く。各地域大会を隔年に開催する。
- 3) 常任理事会：会長（公選）、事務局長（会長指名後常任理事会の承認）、機関紙編集長（会長指名）、前会長、財務委員長（会長指名後実行委員会の承認）によって構成され、理事会（隔年の世界大会時に開催）の付託を受けて会務につき運営する。
- 4) 常置委員会：表彰委員会、規約検討委員会、カリキュラム・規準検討委員会、会員等審査委員会、財務委員会、歴史資料委員会、役員推薦委員会、研究委員会、声明提案委員会の9委員会があり、各事項について処理する。
- 5) 専門分科会：比較体育学、ダンス、女性スポーツ、健康教育、体育スポーツ史研究などを含めて32の専門分科会があり、世界大会・地域大会の際の分科会シンポジウム等行事を企画実施する。

### 4. 機関紙

「イチパージャーナル」（季刊）を編集・発行し、全会員・関係機関に配送している。但し編集長の辞任・新編集長選任が起り、過去半年余り休刊中である。



第4回イチパー・アジア地域学会大会（バンコック、2003）  
開会式における学童による民族舞踊



全大会風景

## イチパーの近年の主要役員及び世界学会大会, アジア地域学会の近年の活動

会 長 ケイン (英国, 1988-1991),      副会長 コーベット (米国, 1988-1991)  
          コーベット (米国, 1991-1999), 副会長 波多野 (日本, 1991-1995)  
          マレー (米国, 1999-2003),      副会長 チャン (韓国, 1995-1999),  
          ヤング (米国, 2003-2007),      副会長席は1999に廃止  
 事務局長 ヤング (米国, 1993-2003)      事務局長 空席 (2003-現在)  
 アジア地域担当副会長  
          ジュー・ホー・チャン (韓国, 1991-1995)      波多野 (日本, 1995-1999)  
          デブリース (マレーシア, 1999-2007)  
 事務局長 フー (香港, 1993-1999)      ヴィジット (タイ, 2003-2007)

1991	第32年次イチパー世界学会大会	アイルランド国	リメリック	
1993	第34年次世界学会大会	日本	横浜	
1994	第1回イチパー・アジア地域学会大会	マレーシア国	クアラルンプール	組織委員会会長 デブリース
1995	第36年次イチパー世界学会大会	米国	フロリダ大学	
1996	第2回イチパーアジア地域学会大会	フィリピン国	セブ島	組織委員会会長 バウゾン
1997	第38年次イチパー世界学会大会	韓国	ソウル	
1999	第40年次世界学会大会	エジプト	カイロ	
2000	第3回イチパー・アジア地域学会大会	マレーシア国	クアラルンプール	組織委員会会長 デブリース
2002	第43年次イチパー世界学会大会	台湾	台北	
2003	第4回イチパー・アジア地域学会大会	タイ国	バンコック	組織委員会会長 ヴィジット
2004	第5回イチパー・アジア地域学会大会	日本国	鹿屋市 (予定)	組織委員会会長 波多野
2005	第46年次イチパー世界学会大会	トルコ	イスタンブール (予定)	



第4回イチパー・アジア地域学会大会 (バンコック, 2003)  
レセプションにおける民族芸能ショー

別掲3

## 体育の専門指導者養成に関する国際基準

（イチパー制定1997，ユネスコ批准2001）要約

1. 目的：イチパーは良質な体育プログラムを世界中の学齢期の子どもたちに提供することを目指すので、体育の専門指導者に関する基準内容を設定するものである。その養成課程のカリキュラム内容は国際的に共通して知識と技術の両面が含まれるべきである。また、この養成課程は基本的に4年制大学学部レベルに位置付けられ、更に大学院レベルへと連絡しているべきである。
2. 内容基準：免許を伴うカリキュラムの卒業基準としては、単に身体資質があると言う入学基準にとどまらず、知識（習得学力）・技術（運動能力，体力，コミュニケーション能力，施設用具の利用能力）を身につけ、活動的で健康体力づくりを目指すライフスタイルを身に付けているべきである。上記の水準を達成するためのカリキュラムを提供することが、養成機関の義務である。
3. カリキュラム内容の一応の基準を示すが、時代の変化に対応するため、8年ごとに再検討するのが良い。
  - 1) 基礎的知識（各30時間の履修）：

体育の哲学的側面，体育の歴史的観点，人体解剖学と身体機能，身体活動のキネシオロジー的側面，人体生理学と運動への適応，身体活動の心理的側面（動機付けと欲求，心配とストレス自己感覚），身体活動の社会的側面（社会的ダイナミクス，倫理と道徳，文化的・人種的・性的差異），運動発達の理論（成熟及び基本的動作の発達過程），運動学習の理論（基礎的及び複合的スキル，認知・感情・運動神経的分野）
  - 2) 専門的知識技能（各60時間）：

専門領域としての体育学，個人及び社会としての体育の効果（生活の質との関係）の知識，学校体育の理論（歴史的，社会政策的観点），体育の個人的思想を育てる技能と知識，学術水準を保持しつつ研究と他者への奉仕の技能を習得，身体運動とスポーツの文化的側面，多様な集団に対する体育カリキュラム提供の技術，体育施設用具の健全運用とリーダーシップ
  - 3) 教育学的知識と技能（各60時間）：

教育学的学習の理論，効果的指導の理論と適用，カリキュラムを指導・履修課程に具体化する技能，系統的学習の理論と実際，運動分析・身体活動・履修状況の評価，学級運営の理論と実際

# 第一福祉大学

第一福祉大学 山崎先也

## 1. 第一福祉大学の特色

第一福祉大学は平成14年4月に福岡県太宰府市に開学した福祉の総合大学であり、人間社会福祉学部には社会福祉学科、人間福祉学科、介護福祉学科、心理学科および福祉産業学科の5学科（600名定員）を設けている。本学では、社会福祉士国家試験受験資格（社会福祉学科、人間福祉学科、介護福祉学科、福祉産業学科）および精神保健福祉士国家試験受験資格（心理学科）を取得することができる。また、介護福祉学科において所定の単位を修得すれば、卒業時に介護福祉士の資格を得ることができる。心理学科では認定心理士の資格を得ることができる。



写真1 第一福祉大学正面西側からの建物

## 2. 健康・スポーツ関連授業科目

健康・スポーツ科学系の授業科目は、教養教育科目（スポーツ1、スポーツ2、健康科学）と専門教育科目（生涯スポーツ論、レクリエーション活動援助法、専門演習Ⅰ、Ⅱ）に分類される。教養教育科目であるスポーツ1（通年、2単位）および健康科学（半期、2単位）は1年次に開講、スポーツ2（通年、2単位）は2年次に開講されており、全学科において選択必修科目（1科目2単位以上の修得）である。また、4単位以上修得した場合、社会福祉学科、人間福祉学科、心理学科および福祉産業学科においては教養教育科目の卒業要件単位（32単位）に含めることが可能である。

しかし、介護福祉学科では、教養教育科目の卒業要件単位（36単位）に含めることができない。専門教育

科目である生涯スポーツ論（半期、2単位）は、人間福祉学科のみに3年次に開講されている選択科目である。

また、レクリエーション活動援助法（通年、2単位）は介護福祉学科の3年次に開講されている必修科目である。専門演習（卒業論文含む）は、社会福祉学科および人間福祉学科の3年次、4年次に担当している。

## 3. 授業内容および目標

### 1) 教養教育科目

- (1) スポーツ1；中強度のスポーツを中心とした健康・体力づくりの実習である。具体的には、バドミントン、ソフトバレーボール、フットサル、卓球などのスポーツ種目を教材にしながら、体力の向上、スポーツ技術の習得、人間関係の向上、そしてスポーツの楽しさを体験しながら、生涯にわたってスポーツを継続する能力を養うことを目標としている。
- (2) スポーツ2；軽度のスポーツを中心とした健康・体力づくりの実習である。ウォーキング、ジョギング、バタック、フライングディスク、アルティメット、バウンドテニス、SAQトレーニングなどのニュースポーツと称される軽度のスポーツや視覚障害者スポーツを体験すると同時に、高齢者や障害者などに指導できる能力を養うことを目標としている。また、血圧や心拍数の測定などを行い、主観的な運動強度と客観的な運動強度の違いを認識させている。
- (3) 健康科学；スポーツ科学を中心とした健康・体力づくりの講義である。運動やスポーツによる体力の向上やストレス解消などの身体的・心理的効果やその促進のための実践方法を習得する。また健康や生活習慣を望ましい方向に変容するための能力を養うことを目標としている。

### 2) 専門教育科目

- (1) 生涯スポーツ論；生涯スポーツの理念や考え方、生涯スポーツ振興の中心的フィールドとなる地域社会を基盤とした振興方策や振興条件などについて学ぶ。また、スポーツプログラム作成、仲間づくり組織づくりなどのグループワークを行う。

- (2) レクリエーション活動援助法；レクリエーション活動の意義や援助者としての役割について理解を深め、対象者に合わせたレクリエーション活動の企画、運営、評価の方法を学ぶとともに、福祉レクリエーション活動者の実践援助能力の習得と向上をはかることを目標としている。
- (3) 専門演習Ⅰ、Ⅱ（卒業論文含む）；福祉と運動・スポーツの問題を取り上げる。障害者のスポーツ、高齢者のスポーツ、軽度の疾病者のスポーツおよび健康・生活習慣・福祉などに対する意識・行動調査などの研究分野の中で課題の設定を行い、研究課題を追求する能力を養う（社会福祉学科）。高齢者や障害者などに対する運動処方、スポーツプログラミング、心理的サポートの方法を研究する。さらにスポーツ組織、施設、指導者、指導者養成制度、スポーツ大会、ルールなど、高齢者や障害者に対するスポーツ環境や施設についての調査および研究を行う（人間福祉学科）。



写真2 学内での実習（救急救命法）風景

#### 4. 体育会

本学の体育会には、フットサル部、バドミントン部、剣道部、バスケットボール部、バレーボール部、サッカー部、軟式野球部、ボクシング部、硬式テニス部、卓球部、弓道部、アイススケート部がある。各クラブとも活発に活動し、優秀な成績を収めている部もある。

#### 5. 今後の課題

選択必修科目であるスポーツ1、スポーツ2、健康科学のうち、最も履修者数が多いのはスポーツ1であり、健康科学と併せて履修する学生も多くみられる。また、スポーツ2を履修する学生は、スポーツ1の単位を既に修得した学生が多い。体育会（課外活動）の参加者も多く見られ、スポーツに対する意識が高い傾向にあると推測される。

今後、「福祉と運動・スポーツ」を関連づけた講義や実技の内容を検討し、福祉社会に貢献できる学生を育成していくことが課題である。

（なお、本学は岩崎健一、徳永幹雄、瀧 信子、山崎先也の4教官で担当している）



写真3 スポーツクラブの活動風景

## 「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」春期研修会の概要

1. 開催期日：平成16年3月22日（月）～23日（火）
2. 会場：国民宿舎「レインボー桜島」
3. 研修内容：
  - (1) 特別講演  
「脳 ― その喜びと悲しみ ―」  
上津原 甲一（鹿児島市立病院副院長・脳神経外科部長）
  - (2) シンポジウムⅠ 「魅力ある授業づくり ― その具体戦略とは何か？ ―」
    - 1) 「私の大学体育授業実践：スポーツや性の問題を社会科学的視点で考察する力を育てる講義の創造に向けて」  
西谷 憲明（鹿児島国際大学）
    - 2) 「体育授業を充実させるいくつかの具体戦略」  
道向 良（活水女子大学）
  - (3) シンポジウムⅡ 「地域貢献の方法と課題」
    - 1) 「スポーツによる地域貢献とプログラム開発」  
富山 浩三（北九州市立大学）
    - 2) 「行政の転倒予防教室への学問的支援」  
飯干 明（鹿児島大学）
    - 3) 「久留米大学におけるトレーナー養成の組織化と課題」  
満園 良一（久留米大学）
  - (4) 一般研究発表
    - 1) 行動変容技法を活用した大学体育授業の有効性  
山口 幸生，甲斐 裕子，山津 幸司（福岡大学）
    - 2) 保健体育科目を通しての健康度・生活習慣指導  
山崎 先也，徳永 幹雄，岩崎 健一（第一福祉大学）
    - 3) 大学に対する社会の評価と東海大学（Tokai University Educational System）の試み  
米沢 久（九州東海大学）
    - 4) 大学教育の地域社会への貢献  
松永 恵子，榎本 瞳，谷口 茜，山口 郁美（県立長崎シーボルト大学）





## 九州地区大学体育連合春期研修会に参加して

別府溝部学園短期大学介護福祉学科 助教授 正野 知 基

九州地区大学体育連合と私の出会いは、8年前に学生第二課の課長となり会費納入を担当するようになってからです。誠に恥ずかしながら、その時に初めて会の存在を知りました。しかし、その後も春期研修会には勤務校の仕事が重なり出席することができませんでした。平成12年度の春期研修会を別府で開催するというので、大分大学の西本先生からお声をかけていただき、少しだけですがお手伝いをさせていただきました。研修会前日は勤務校の学科の会議、2日目は卒業判定会議と県外での開催であったならば絶対に参加できなかったところ、地元での開催であったので初日だけ参加させていただきました。そして、その後続けて参加していればよいのですが、今回が2回目の参加で、フルに参加したのは初めてとなります。こんな私が紙面を汚してよいものであろうかと思いつつも、初めて全てのプログラムに参加した感想を書かせていただきます。

一般研究発表では本研修会のテーマに沿って、福岡大学の山口幸生先生が大学体育授業に簡易的な行動変容技法を活用した介入の結果を、また第一福祉大学の山崎先也先生が保健体育科目の授業前後に健康度や生活習慣等を調査・検討した結果を発表された。九州東海大学の米沢久先生は、大学評価の動向について概観し、勤務されている大学の取り組みを例示された。大学における授業を学生にとって魅力あるものとし、学生の今後の人生の一助となるようにするための工夫と、その大学が存在する地域社会から世界的な動向も考慮し、幅広い視野をもって大学の果たすべき役割を考えていなければならないことを再認識させられました。県立長崎シーボルト大学の松永恵子先生は、ご指導された3名の学生さんの卒業論文の発表をコーディネートされました。「保健体育教師が一人一人が、今自分にできることは何か、地域と大学の接点は何か、学生と教師がともにできることは何かなど、創造的な視点が研究と教育の融合化に繋がると考える。」と述べられた先生の実践を紹介していただき、私にとっては感動ものでした。他大学の先生方からの質問を受けたりして、発表された学生さん達の良い思い出となったの

ではないでしょうか。

シンポジウムⅠは「魅力ある授業づくり——その具体戦略とは何か——」と題し、鹿児島国際大学の西谷憲明先生、活水女子大学の道向良先生のお二人がそれぞれの立場から発表された。西谷先生からは、スポーツ性の問題を社会科学的視点で考察する力を育てる講義の創造に向けての実践例が提示された。道向先生は、大学体育授業を充実させるための具体的戦略は、アイデアとしては既に出尽くしているの、このアイデアをいかにして教育実践に取り組んでいくかが課題であるとの考えを示された。両先生の大学体育に対する熱い思いを聞かされ、はたして自分がこのような思いをもって授業に学生に向かって行っているだろうかと自問自答をさせられました。

特別講演は、鹿児島市立病院副院長で脳神経外科部長の上津原甲一先生による「脳——その喜びと悲しみ——」と題した講演でした。脳の話ということで興味はあるのだが何となく難しそうだなという思いで臨みました。しかし、その思いはみごとに吹き飛び、非常にわかりやすく、こぼれ話的なものも交えながら楽しく拝聴させていただきました。

情報交換全体会は、和やかな雰囲気の中で開催されました。特筆すべき点は、中央大学の森正明先生が昨年に引き続き参加されたことと、四国学院大学の逢坂十美先生の参加であろう。昨年の柿山先生の感想の中にもあるように、九州地区大学体育連合の存在価値を認識させられる出来事であろう。今後このような交流がさらに盛んとなり、活発な意見交換ができることを願っています。会の終了後も宿舎の各部屋で楽しい情報交換会第2部が行われ夜が更けていきました。

研修2日目の最初のプログラムは総会でした。審議事項の中で、九州地区大学体育連合の今後の方向性について、組織、研究プロジェクト推進について、組織の拡大・充実に向けた取り組み等の提案がなされました。

シンポジウムⅡは、「地域貢献の方法と課題」と題し、宮崎大学の根上優先生をコーディネータとして3名の先生方の発表がありました。北九州市立大学の富

山浩三先生は、スポーツを通じた大学の地域貢献の形態が「クラブ化」へと向かい、単なるボランティアではなく、大学の持つ知的資源、ノウハウおよびネットワークの提供によるコミュニティービジネス確立へと進んでいくとの考えを示されました。鹿児島大学の飯干明先生は、行政が実施した転倒予防教室への学問的支援の実例を、久留米大学の満園良一先生からは、勤務校におけるトレーナ教育の取り組みを地域における活動も含めて紹介していただきました。これからの方

向性について、実際に取り組まれている事例を通して考える良い機会となりました。

初めて研修会の全プログラムに参加して、各自の専門研究領域を超越し、大学体育の教員としての共通課題である「授業」そして「地域への貢献」を考えることのできる貴重な研修会であるとの認識を強く持つことができました。また、今年は芋焼酎で来年は球磨焼酎だなど、少々不謹慎な思いも抱きながら次回研修会へ参加できることを楽しみにしております。

## 春期研修会を終えて

鹿児島大学 末吉靖宏

平成15年度の九州地区大学体育連合鹿児島県地区の理事を務めることになった。本年度の研修会議の開催地が鹿児島県であったため、その研修会議の準備を担当した。この務めの締めくくりとして、本稿のまとめがある。筆者自身、これまでの本誌本欄の記載内容を参考にさせていただいた点が多々あった。そこで、本稿も、今後体育連合その他類似の会議の準備担当に当たられた方の参考になればということ念頭にまとめさせていただく。

今年度から、事務局も鹿児島県となり、鹿児島国際大学に引き受けていただいた。従って事務局と開催地が一致することになった。このため、事務局の先生方には、いろいろな面でご支援いただいたが、開催県理事の役割をまとめると、基本的には以下のものがあつた。すなわち、①会場の予約、②発表に関わる機材の準備、③参加申込み受付、④発表者との連絡、⑤宿泊の手配、⑥情報交換会の予約と当日の司会、⑦地元企画としての特別講演の演者の選定と依頼などである。

今回の開催地企画としての特別講演の講演者は、鹿児島市立病院副院長であり、脳神経外科部長であられる上津原甲一先生にお願いした。鹿児島県内の最初の理事会の折、鹿児島女子短期大学の小松先生から上津原先生をご紹介いただいた。私自身も脳の機能について興味があり、また、われわれが健康問題について考えるとき、今後ますます、脳が重要なテーマになってくると考えていたので、是非お願いしたいと考えた。

先生のご講演は、多数のスライドを用いて、難解な脳の仕組みを非常にわかり易くお話しいただいた。その説明には、文学、音楽、美術、スポーツなど様々な分野のことが例として盛り込まれ、理解を促進したが、先生の博識ぶりには、驚かされるばかりであった。この講演をきっかけに、体育・健康関連の授業で脳の問題を積極的に取り上げる試みが増えれば幸いである。

研修は、2日間にわたって行われた。1日目は、一般研究、シンポジウムⅠ、特別講演、2日目は、シンポジウムⅡという構成であった。

一般研究では、福岡大学・山口先生、第一福祉大学・山崎先生、九州東海大学・米沢先生、県立長崎シーボルト大学・松永先生の4氏による発表があつた。それぞれの発表内容は、他に譲るが、県立長崎シーボルト大学

の松永先生のご発表は、先生の大学の3人の学生さんの卒業論文で構成されるものであつた。学術研究目的の学会とは異なり、本研究会議は教育研究を中心に置く会議であつて、その中味を提示するために、様々なプレゼンテーションの方法が考えられ、私には、今回の松永先生の試みは、この会議の特性をうまく捉えた一方法にみえた。

シンポジウムⅠは「魅力ある授業づくり — その具体的戦略とは何か? —」というタイトルで、パネリストの鹿児島国際大学・西谷先生、活水女子大学・道向先生による基調講演の後、フロアとの討論があつた。パネリストのお二人の基調講演自体が体育の授業に対する熱い思いがひしひしと伝わる内容であり、討論もそれにつられて熱を帯びたものとなつた。

シンポジウムⅡはタイトルが「地域貢献の方法と課題」で、3人のパネリストの基調講演が行われた。パネリストは、北九州市立大学・富山先生、久留米大学・満園先生、鹿児島大学・飯干先生の3氏である。このシンポジウムの内容は、多くの参加者にとってほとんど未知の領域ではなかつたか。それだけに、関心が高かつたと思う。国立大学は、この4月から法人化する。これを契機に各大学では、様々な試みの模索が始まるであろう。その影響は、法人化する国公立大学にとどまらないと考えられる。そのような状況の中で、本シンポジウムのテーマは非常にタイムリーであつたと思う。

このシンポジウムのお話を聞いて、大学体育もこれまでのような画一的なものでなく、各大学の事情に合わせた個性的、特徴的なものになっていくのではないかと考えた。久留米大学の試みなどがその好例である。本会議が、そのような個性的な取り組みの長所・短所を率直に報告しあえる会になっていけば、会員の関心が更に高まり、参加者も増えていくのではないかと考えた。

以上のように、今回の会議の内容はバラエティーに富むものとなつた。ご発表いただいた各先生には感謝の念でいっぱいである。参加者のひとりとして、「得した気分」に浸つたのは私だけだつたらうか?

最後に、全ての参加者の皆様、事務局を務めていただいた鹿児島国際大学の方々、会の運営にご協力いただいた開催地鹿児島先生方に感謝の言葉を申し上げ、また、今後のこの会議の発展をお祈りして本稿を閉じたいと思う。